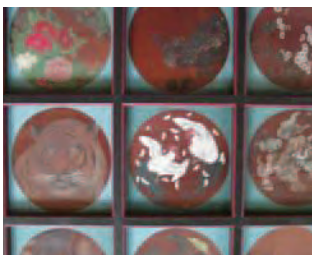


瀬戸地区・洞

瀬戸村でも早くから開けた地区で、江戸時代から現在に至るまで窯業生産が行われています。伝統的な本業焼に代表される陶器づくりにこだわり、窯垣の小径や本業窯などが職人たちの息吹を今日に伝えています。



▲山門



▲天井絵



▲陶質十六羅漢塑像（市指定文化財）

宝泉寺

宝泉寺は建長4年（1252）に霊水山神宮寺として創建されましたが、慶長元年（1596）に火災により焼失したとされています。その後、寛永10年（1633）に、赤津の雲興寺15世興南和尚により、当地に曹洞宗の禅刹大昌山宝泉寺が開かれました。本堂には本尊釈迦無尼如来、観音堂には千手千眼観音菩薩像が祀られ、その2階は修行僧たちの修行の場である座禅堂になっています。山門は全国的にも珍しい上下2層構造の竜宮造りとなっていて、階上部分は鐘楼になっています。本堂の陶質十六羅漢塑像は市指定文化財（工芸品）に指定されています。天井には、絵付職人が書いたとされる天井絵があり、非常に見応えがあります。11月にはお薬師さん（アメンボ祭り）が開催されます。



窯垣の小径

洞の細い路地には、「ツク」・「エブタ」・「エンゴロ」といった窯道具を埋め込んだ塀が続く小径があります。この全長 400 m ほどの「窯垣の小径」は、かつては洞のメインストリートであり、窯場で働く人たちが、陶磁器や燃料を運ぶために行き来した汗の道でもありました。窯垣は江戸時代の終り頃からみられますが、本格的に造られ始めた年代について詳しいことは分かっていません。しかし、窯道具が大量に不要になったのは約 100 年前（明治末～大正）の登窯から石炭窯への転換期と戦時中の企業整備による窯屋の大量の転廃業、そして昭和 20 年代～昭和 40 年代にかけての登窯の終焉期で、それを契機に窯垣が多く築かれ、今の姿になったと考えられています。

窯垣の小径資料館



開館時間：10:00 ～ 15:00
 休館日：水曜日（祝日の場合は翌平日）、年末年始およびお盆
 駐車場：有（窯垣の小径駐車場）
 入館料：無料



洞の窯元旧寺田家の屋敷を平成 7 年（1995）に改修し、現在、「窯垣の小径資料館」として公開されています。敷地内には母屋、倉庫、離れ（客間）があり、洞の旧家の典型的な家屋の配置がみられます。母屋は明治 2 年（1869）に建てられ、その後倉庫、離れを増築しています。浴室やトイレには、日本の近代量産タイル第一号である洞特産品の本業タイルが敷き詰められており、この地区の特徴をうかがうことができます。

王子窯



王子窯の工房（モロ）は、明治 33 年（1900）に建築されたもので、木造 2 階建て、間口 10 間、奥行 3 間と規模としては若干大きめのものです。内部は天井が低く、窓が少ない典型的なモロの造りとなっています。東側の通りから入ると、左手に窯場があり、現在は使われていませんが瀬戸では最大級の重油窯の姿を今もみることができます。また、近代において瀬戸の風景を特徴づけた重油窯の煙突が今も残されており、かつて窯業生産で活況を呈した当時の姿を偲ぶことができます。

窯跡の杜



瀬戸地区・洞

「窯跡の杜」には、かつて、江戸時代後期から戦後まで操業した連房式登窯が2基存在していました。平成25年(2013)の山開きにあわせて発掘調査が行われ、窯の位置や周辺の工房跡の状況などが明らかにされています。現在、それらの成果をもとに整備され、窯跡の位置や規模がわかるように案内板が置かれ、周辺には工房跡が存在したことを示す地形もみることができます。一つの杜の中で近世から近代に至る瀬戸窯業の盛況ぶりを感じることができる貴重な文化・産業遺産です。

洞本業窯（市指定文化財 / 建造物）



連房式登窯は、江戸時代初期に瀬戸でも使用されるようになり、それ以降、石炭窯等になるまでせとものを焼き続けてきました。洞本業窯は、「窯跡の杜」内に所在した奥洞窯（東洞A窯跡）が、昭和24年(1949)に今の場所に移築されたものです。現在の瀬戸でこのように連房式登窯の窯体が残されている例はほとんどなく、きわめて貴重な窯であるため、市指定文化財（建造物）となっています。窯の規模は全長14m、最大幅は7mで、この窯で製品を焼成するのにかかる日数は7日間といわれています。昭和54年(1979)までは実際に使用されていました。



陶器



窯器



創造



街



交流



自然



祭り

瀬戸地区・洞地図



- ❶ 宝泉寺 (P16)
- ❷ 窯垣の小径 (P17)
- ❸ 窯垣の小径資料館 (P18)
- ❹ 王子窯 (P18)
- ❺ 窯跡の杜 (P19)
- ❻ 洞本業窯 (P19)